

# 木綿縞の染織文化

——越原家の縞帳分析から(1)——

河村瑞江・山田真由美

## The Culture of Dyeing and Weaving Striped Cotton

— A Study of the Koshiharas' Shima-cho, Part I —

Mizue KAWAMURA and Mayumi YAMADA

### 緒 言

日本の常民の染織文化は、木綿の発達によって変革したといえる。特に江戸時代から明治期における日常衣料の代表は木綿縞であり、それらは常民の染織文化である。

縞は、織物技術上から見て、最も素朴な発想から生まれた模様で、水平又は垂直の単純な線から成り立つ造形の基本的形態である。その系譜を時代と共に辿ってみると、しまの字や、呼称また、その価値観や美意識も世相によって複雑に変貌し今日に至っている。

江戸時代後期から、明治期の庶民の染織文様として発達した縞文様は、主婦達のささやかな美を求める心と手によって、織りあげられたデザインである。またそれらの縞を集めた縞見本ともいえる縞本（縞帳）は生活と共に生きた証しであり、染織文化を物語る貴重な資料であると考え、従って、それらを分析し記録に残す必要性を感じている。

今回は、岐阜県の山村に残存していた縞帳を分析し、記録することによって、木綿縞の染織文化を解明する一助となると考えこれを進めた。

### 方 法

#### 1. 縞帳分析方法の検討

常民の生活用具は、近年になって、民俗資料館、郷土民俗資料館で保存されるに至った。それらの分類方法は民俗学者、渋沢敬三氏の民具蒐集分類によるところが大きい。しかし、分析表現方法など、まだ確立されておらず民具、風俗研究及び考古学者らによって論議、検討されている。縞帳もそれらに類するもので、常民の染織文化資料として統一した形で記録分析したいと考え、その方法を検討しながら進めた。

2. 縞帳分析の研究と文献検索から「河内木綿の観察」<sup>1)</sup>、「南奥の縞帳に関する研究」<sup>2)</sup>報告と「三河湾の木綿縞研究」<sup>3)</sup>の研究報告と共通分析の方法を探り、「考古学的出土裂の調査報告」<sup>4)</sup>等を参考に縞帳の分析を行った。

3. 1.密度、2.縞割、3.縞の構成配色、4.紡ぎ方法、5.材質、6.組織、7.特色、その他の項目にわけて分析し、一裂1枚のカードを作成した。

分析調査においては、生活文化遺物であるために現物保存の方法をとりルーペによる測定を主とした。ルーペ7倍、マイクロルーペ20倍を使用し、649種の裂資料を必要に応じて、倍率

表1 たて糸の密度

たて糸本数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	合計	%		
10																							
11																							
12																							
13																							
14																							
15																							
16		1		1																	2	0.31	
17																							
18	1			1					1					1					1		5	0.77	
19				1																	1	0.15	
20	1	6	7	1	7	5	3	2	3	4	4		6	6	3	2			2		62	9.55	
21	1			1																1		3	0.47
22	3	8	4	4	8	5		6	7	4	2		8	5	6	3	1			4		78	12.02
23									1					1								2	0.31
24	13	16	5	4	8	6	9	1	10	8	9		7	3	8	1	1	3	4		116	17.87	
25				1					1													2	0.31
26	3	4	3	3	2	2	3	6	6	6	7	1	18	5	6	3			4		82	12.63	
27															2							2	0.31
28	7	2	4	2	8	6	2	3	4	4	4	8	10	3	12	1		3	6		89	13.71	
29								1											1			2	0.31
30	4	7	2	5	1	1	3	1	6	2	9	5	4	5	2	1		4	8		70	10.79	
31																			1			1	0.15
32	2	5	2	3	3	1	1	2	3	1		3	1	1	2	3			5	3	41	6.32	
33				2																		2	0.31
34	3			2	1	1				1	1	3	3	2	1			2			20	3.08	
35																							
36	1	2	2	1	1	2			4		1	8		1	1			1	4		29	4.47	
37																							
38			1	1	1					1		2						1			7	1.08	
39																							
40		1									1	1									3	0.47	
41																							
42				1																		1	0.15
43																							
44				1																		1	0.15
45																							
46																							
47																							
48																							
49																							
50									1													1	0.15
51																							
52																							
53																							
不明		3	2		1	6	1		1	4				1				4	4		27	4.16	
合計	39	55	32	35	41	35	22	22	48	35	38	31	57	34	43	14	2	25	41	649	100		

表2 よこ糸の密度

よこ糸本数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	合計	%
10		1							1											2	0.31
11				1																1	0.15
12																					
13																					
14				1			2			1			1	1	2				2	10	1.54
15														1						1	0.15
16	2	4	3	2	1	4	1	1		2	4	1	2	4	2			1	4	38	5.86
17																					
18	12	16	6	4	6	2	3	4	11	5	6	1	10	5	4	1			5	101	15.56
19																					
20	10	5	5	7	6	8	3	4	8	4	5		16	6	7	3	1		6	104	16.03
21		1							1		1									3	0.47
22	3	8	5	5	7	5	3	4	9	4	6	3	9	8	1	6	1	4	2	93	14.33
23																					
24	5	5	1	4	6	4	1	5	7	6	5	2	8	2	8	1		1	6	77	11.86
25																					
26	2		3	2	4	1	4	2	7	2	5	7	9	3	14	1		5	5	76	11.71
27																					
28	1	4	4	5	6	4	4	2		3	5	1	2	2	2	1			3	49	7.55
29																					
30	3	4	1	2	1				1	1		3			3	1		5		25	3.85
31																					
32		4			1					3		3						2	3	16	2.47
33																					
34	1		2						1			1		1				2		8	1.23
35																					
36				1	2	1			1			5								10	1.54
37																		1		1	0.15
38																					
39																					
40				1								1							1	3	0.47
41																					
42												1								1	0.15
43																					
44												1								1	0.15
45																					
46																					
47																					
48																					
49																					
50																					
51																					
52												2								2	0.31
53																					
不明		3	2		1	6	1		1	4				1				4	4	27	4.16
合計	39	55	32	35	41	35	22	22	48	35	38	31	57	34	43	14	2	25	41	649	100

を変えて測定。密度は1 cm<sup>2</sup>中であるが太さ(番手)が均一でないため測定可能なものは、2～3回移動して測定し、その平均値とした。

紡績、素材の分析は、サンプルが小さい事と、資料の性質上、目測が主体となるので紡績歴、60年の繊維工業所所長の加藤氏、及び、名古屋市工業研究所、染織関係の専門家等、に助言いただきながら鑑別法の方向性を探った。時代が明らかにされている裂と比較検討し、主にループで測定、不明瞭なものは、薬品試験、顕微鏡による一部破壊調査をも行った。

4. 実物の測定と、文献調査の両面から木綿縞の染織文化を採った。

5. 縞帳について

地方によって、呼び方がやや異なっているが一般的に縞帳、縞本といわれるが、嶋本、寫本、縞見本、縞手本などと書かれ、和紙の反古紙を使っている場合が多い。

縞本は自家用を織るための見本帳で、ふとんや衣類を主婦が織る時の参考として、親から子へと伝える資料であったといわれている。

縞帳は一冊に数百種の縞の裂が添付されているものもあり、大きさ、形も千差万別で、人柄がしのばれ生活のにおいを感じさせる。裂の状態、量からみて、1人の女性が織り上げたものばかりでなく交替しあって収集したものも含まれていると思われる。

今回調査した縞帳は、岐阜県西加茂郡白川村越原の越原家の所蔵のもので、たて24.5cm よこ16cmで19ページ、表紙は柿渋引き紙でコヨリで綴られており、明治22年、持主、越原登久と記されている。登久さんは、明治19年に結婚し姓が変わっていることなどを考えると、完成時の日付であって、それ以前に織られた縞と考えられる。内容は649種あり、その中には、絹、木綿、糸入り木綿(絹入り木綿)、織の他にプリントと思われるものが1～2点、縞模様は1リピートないため、縞割の分析ができないものもあった。

## 結果及び考察

### 1. 密度

密度については、たて糸、よこ糸とおよび、たて、よこの地合の関係について分析した。649点のうち染め裂、小片裂等で測定不可能なもの27点をはぶいた。

密度をたて糸とよこ糸にわけて分析した結果、表1 たて糸の密度は、最多密度24本/cm、116点(17.9%)、ついで、28本/cm、89点(13.7%)、26本/cm、82点(12.6%)、22本/cm、78点(12.0%)であった。たて糸は22～28本/cmが371点で57.2%、20～30本/cmにまで広げれば78.3%である。

よこ糸本数は、表2により最多密度20本/cmが104点(16.0%)、18本/cm、101点(15.6%)、22本/cm、93点(14.3%)、24本/cm、77点(11.9%)、26本/cm、76点(11.7%)であり、18～26本/cmの範囲で454点70.0%、18～20本/cmが205点31.6%で、すべての平均値は、たて26.6本/cm、よこ22.9本/cmである。全体の平均値が最多密度より高くなっているのは、絹のみの布が加わっているからである。密度30本/cm以上は絹裂がほとんどであった。20本/cm以下の粗い密度のものは、手紡ぎによるための木綿糸がたてよこ共に使われているものと、空糸(木綿に絹をからませたもの)使いの裂に多くみられた。

表3はたて糸とよこ糸の関係を分析したものでたて、よこの同密度を100とした。最多密度は、たて糸×よこ糸が24本/cm×20本/cmが33点、ついで20本/cm×18本/cmが31点、24本/cm×18本/cmが26点、26本/cm×24本/cmが23点、24本/cm×22本/cmが23点、22本/cm×18本/cmが22点、30本/cm×26本/cmが22点で、よこに対してたての方が密度が高いたて地合が

全体の75.5%であり、たて糸よこ糸の密度が同一のものは、95点、14.6%で、よこの打込みの強いものは、37点、5.7%であった。図1はその分布の状態を表したものである。今回、材質分析表は省いたが、密度分布を更に材質面も加えて観察してみると、たて地合が75.5%のうち例えば、たて30本/cmに対してよこ20~22本/cmに位置するものが比較的多くみられる。これは木綿のたて糸に対して時折絹糸が（木綿より細いのであるが）1本として独立して使われていることからたて地合の率を高くしているといえる。次にたて、よこ地の1:1に値する14.1%の分析結果は、密度20×20本/cm~30×30本/cmに均一に分布をみせておりその相関は得られなかった。実物の裂からそれを観察すると一定の糸つまり凸凹の少ないストレートな糸すなわちスラブ状が比較的多いと感じられた。よこ地合の5.7%に属する裂を分析してみると絹のみの裂と、たて糸は絹と木綿で、木綿の中に、特殊な糸使いの絹が時折使われており、配色は比較的色彩の多いものが抽出された。またたて糸は太い木綿と細い絹を使っているが、糸と糸との間に微妙なすき間ができ、たて糸の空間に対して、よこ糸が打込みやすい状態のものがよこ地合になっていると考えられる。従って素材と密度との関わりが深く、たて糸は絹糸と木綿糸の太さに関係なくランダムに使用しているものと、空糸（よりませ）にしているものに多くみられた。縞帳の裏には縞の設計図ともいえる縞割りが記されており、そこでは木綿糸と絹糸をまぜて使用するものは「よりませ」と記されているが、これは空糸使いを意味していると考えられる。

以上たて、よこ密度の関係を分析から検討を試みたが、種々の要因が加わるので、糸の太さや素材だけでは結論は出しにくい。

図2は、三河地方の密度分析である。この中でまず今回の越原の縞帳と図2-1, 2-3, 2-4は、たて地合で密度分布の状態が似ている。図1と図2-4はたて、よこの密度が広範囲にわたっている。これから考えられることは、家族や仕用人のために種々の織物を使用目的に応じて密度を変えて織っていたこと、また手紡ぎ技術のちがいによって太い細いがあり分布が広まったこと、また図2-4の新城三原屋の縞帳のように江戸-明治-大正までと時代が判明できないために手紡ぎの時代から明治中期以後の紡績糸まで総合した集計のため広範囲に密度が分布したことが考えられる。これら図1, 図2及び文献1)にみられる分布状態から自家用木綿縞の位置づけがおぼろげながら推察できる。

## 2. 縞の構成

今回分析した縞の配色、構成を表4に示した。

### 1) 縞と格子

縞はたて糸の縞割（整経）をすれば、よこは一色で織るだけであり、能率的である。時代の流行や織り手の嗜好にもよるが、たて縞81.5%、格子15.9%であった。縞のデザインが他地域と同様優位を示した。

縞の構成として対称、非対称がある。図3は対称形であり、図4は非対称となり、図4は1リピート74本、30mm、たて糸24本/cmとある。計算上からは1リピート74本であれば30.9mmとなるが、手紡ぎの糸による不規則な太さや絹入り（糸入り）の場合などは計測する箇所によって異なる事もある。これは1単位の模様に対する糸の本数を示したものである。

図3-2の縞割の項、紺10本、次に白2本、紺2本……とある。これは、たて糸の色の順序を示し1リピートの中央の茶6を中心として、左右対称に色糸が整経されていることになり、対称デザインを示す。一方図4-2では、あさぎ9、白2、うす茶9、紺2本の順で縞割がさ

れ、紺20までが1リピートで、そのくり返しのため片流れとなるこの様な縞割は非対称形となる。649点を分布した結果が177:420で非対称形が64.5%以上であった。不明その他は52点、8.0%であるが、これは添付されている縞割が小さく、1リピート分が途中で切られてしまっており分析不可能なものと、無地、柄物である。全体的に1リピートが小さい0.1cmから5cm位でその中は複雑な縞割となっている。日本人の美意識の中に非対称形態を好む傾向があると思われるが、実際にたて糸を整経する作業においても織物の場合は非対称の縞の方がごく

表3 越原家の縞帳 密度分布

たて糸数	よこ糸数	度数	たてよこの率	たて糸数	よこ糸数	度数	たてよこの率	たて糸数	よこ糸数	度数	たてよこの率	たて糸数	よこ糸数	度数	たてよこの率
16	18	1	113	24	16	8	67	28	52	1	186	34	30	2	88
	20	1	125		18	26	75	29	26	1	90		32	2	94
18	16	2	89	26	20	33	83	30	16	1	53	36	34	2	100
	18	3	100		22	23	92		18	2	60		36	1	106
19	16	1	84	26	24	13	100	31	20	9	67	36	42	1	124
20	14	1	70		26	2	108		22	9	73		20	1	56
		15	1	75	25	28	4	117	32	24	6	80	38	22	2
	16	9	80	32		1	133	26		22	87	24		1	67
	18	31	90	26	18	1	72	32	28	12	93	40	26	3	72
	20	16	100		20	1	80		30	8	100		28	4	78
	22	1	110	27	16	3	62	34	34	2	113	42	30	3	83
	26	1	130		18	5	69		30	1	97		32	4	89
	28	1	140	28	20	14	77	33	11	1	34	44	34	2	94
	32	1	160		21	1	81		14	1	44		36	6	100
21	14	1	67	27	22	21	85	34	18	1	56	46	37	1	103
	18	1	86		24	23	92		20	1	63		40	1	111
	20	1	95	28	26	13	100	34	22	5	69	48	52	1	144
22	14	3	64		32	1	123		24	5	75		26	1	68
		16	12	73	27	44	1	169	34	26	12	81	48	28	2
	18	22	82	26		1	96	28		3	88	34		2	89
	20	18	91	28	28	1	104	33	30	7	94	48	36	2	95
	21	1	95		16	1	57		32	5	100		40	2	80
	22	15	100	28	18	8	64	33	20	1	61	48	40	1	100
	24	6	109		20	8	71		40	1	121		42	30	1
	28	1	127	28	22	16	79	34	16	1	47	44	36	1	82
23	18	1	78		24	19	86		22	1	65		50	24	1
		20	1	87	28	26	18	93	34	24	2	71	44	不明	27
24	10	2	42	28		13	100	26		3	76				
		14	4	58		30	5	107		28	5	82			

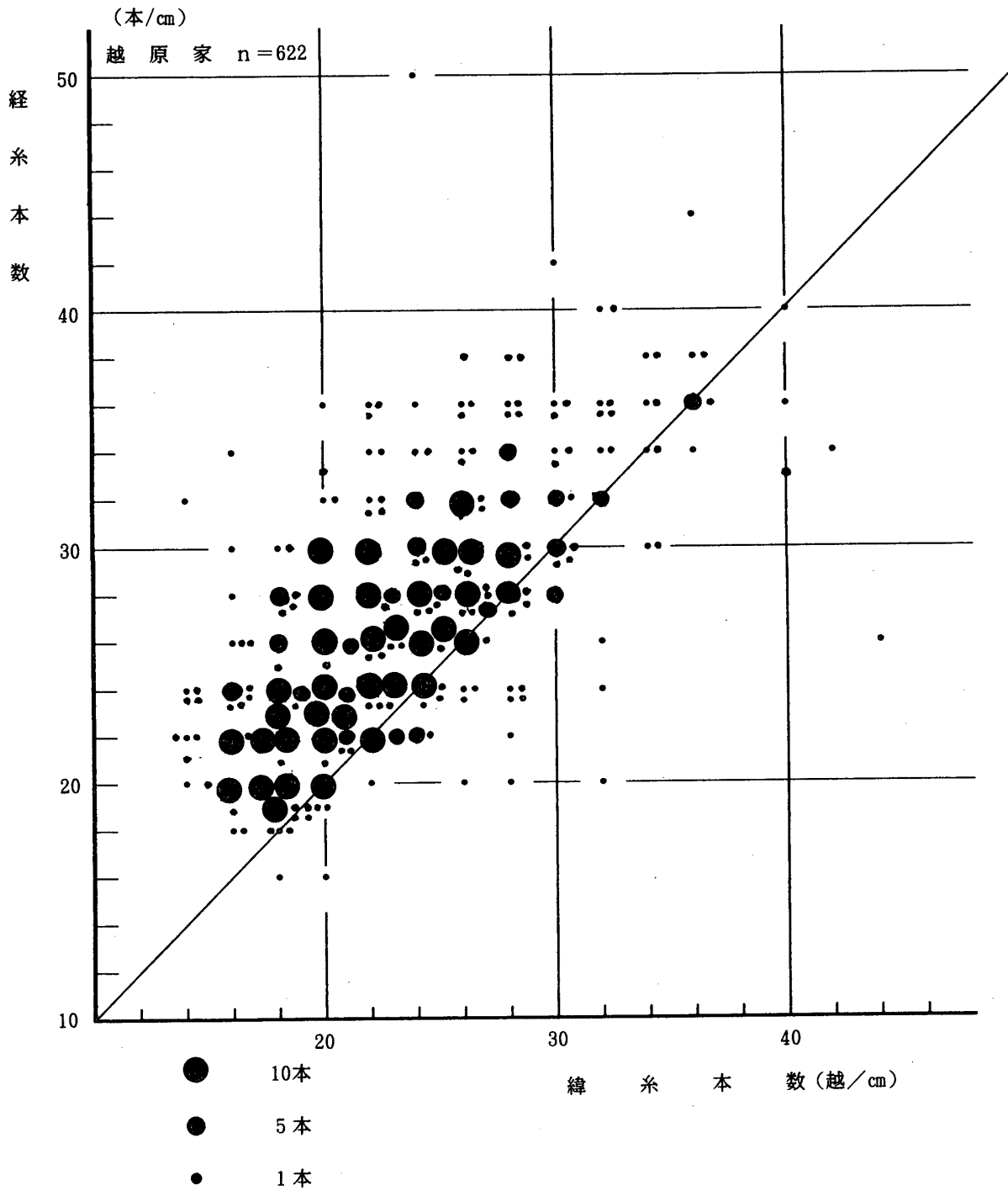


図1 密度分布

自然で計算も単純である。また、くり返して来るべきはずの模様突如として異色の色や糸が入ったり、色糸のむらがみられる裂が多種あり1本の糸や層糸も大事にして織っていた様子を縞帳から伺い知ることができる。それは現在の量産品をみている我々にとっては美しさの再発見でもあった。

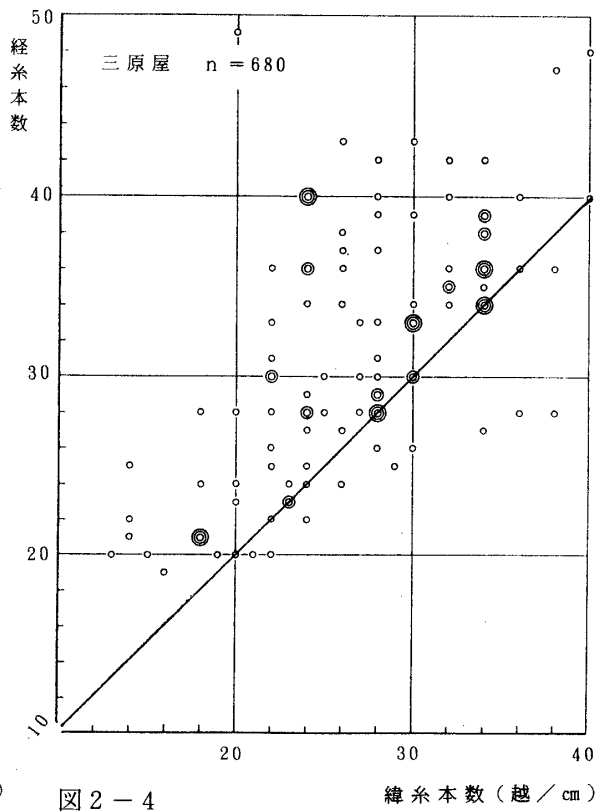
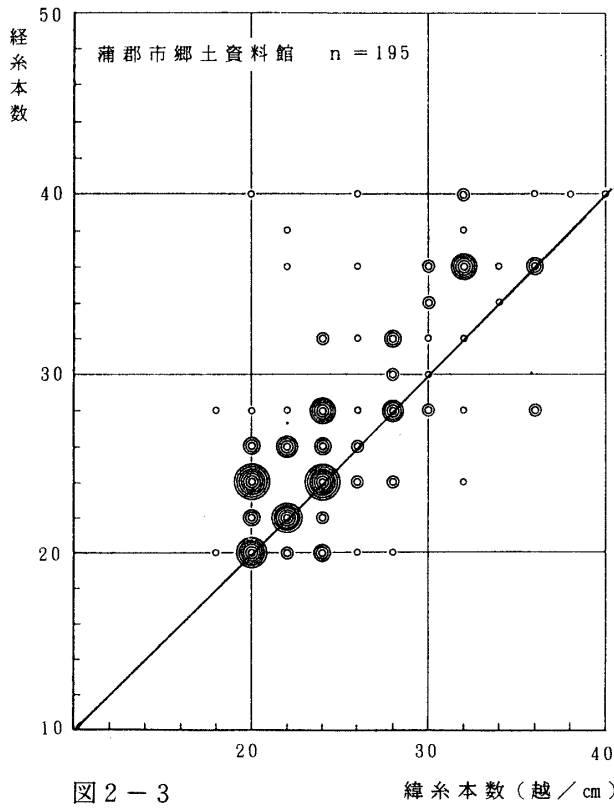
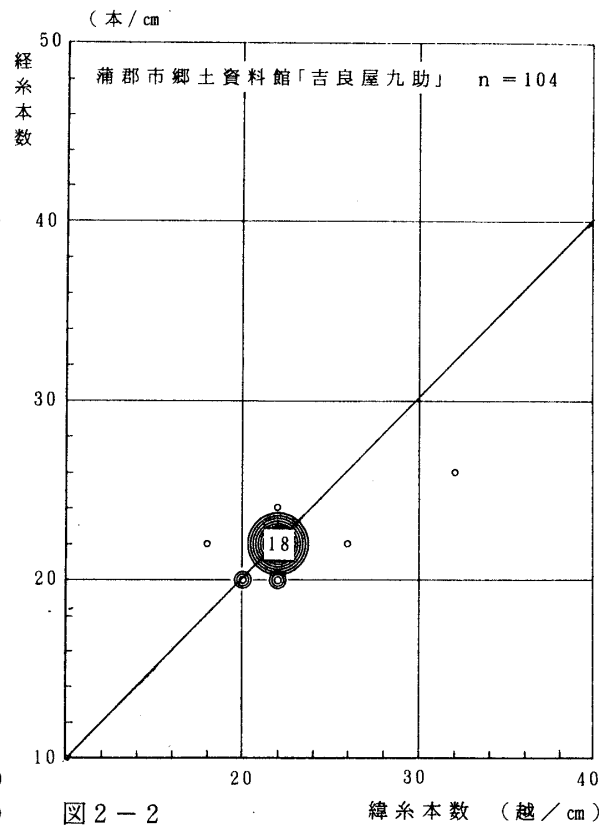
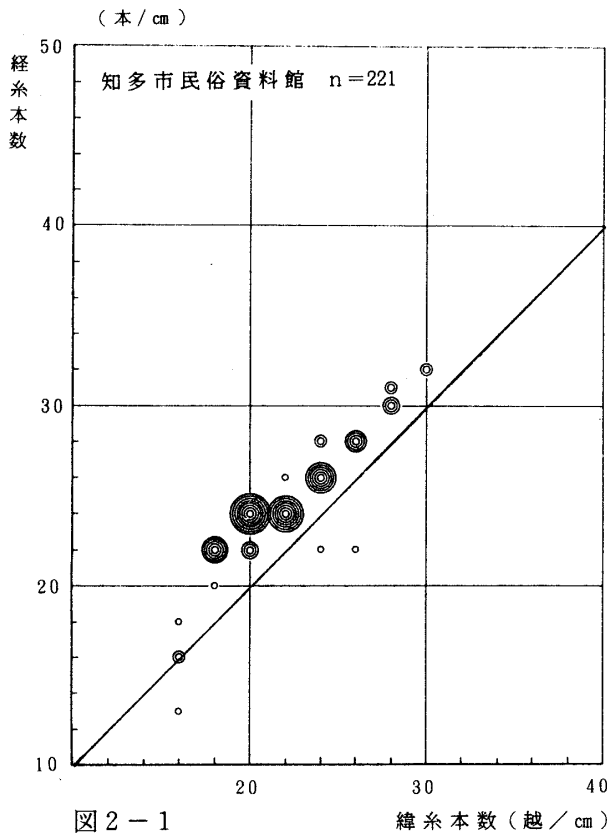


図 2 各地の木綿織の密度分布



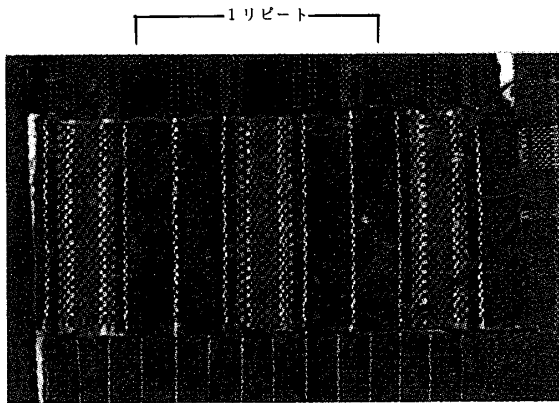


図3-1

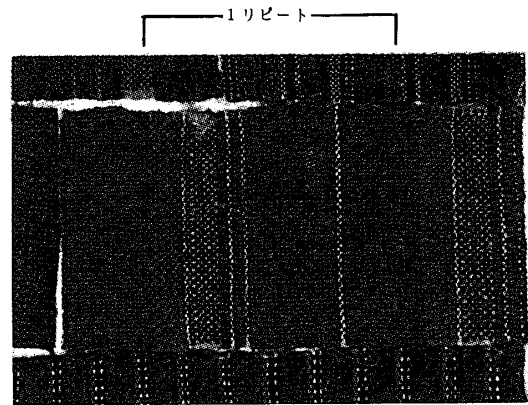


図4-1

1 P	31		
たて	24本/cm		
よこ	18本/cm		
5色	織		
織割	紺	10	2
	白	2	2
	あさぎ	2	2
	うす茶	2	2
	茶	2	2
		6	2
		10	2
構成	1リピート	44本	20mm
	対称		
	手紡		
材質	木綿, 絹 (白, うす茶)		

図3-2 裂の分析カード

1 P	32		
たて	24本/cm		
よこ	22本/cm		
4色	織		
織割	紺	2	2
	あさぎ	9	2
	うす茶	2	2
	白	2	2
		24	20
		9	2
構成	1リピート	74本	30mm
	非対称		
	手紡		
材質	木綿, 絹 (白, うす茶)		

図4-2 裂の分析カード

## 2) 配色と染料

縞帳にみられる木綿織は紺を主体としており、紺と他の色との割合は8：2の配色比率といえる。(表4)の配色分析結果、2色使い243点37.4%、3色使い218点33.6%、4色使い131点20.2%、5色以上は8.5%で6～7色である。2色配色は紺、白、3色配色は紺、白、茶と紺、浅葱、白の配色の出現率が高い。これは、三河、知多の海山村において自家用として織られたと思われる縞帳とほぼ共通した配色率である。

東白川村誌の明治19年調査<sup>9)</sup>によれば、越原に染屋1件とある、これが紺屋と呼ばれるもので、紺は染屋へ出し、他の色は自宅で植物染をしていたと考えられる。紺以外の色を観察すると今回の縞帳は、三河知多地方のそれに比べて赤色素糸が目についたのでこの赤について種々の角度から検討を試みた。三河新城地方の聞き取り調査によれば赤糸はそよごを使っていた。東白川にも自然植生としてそよごが樹生しているので使用した事も考えられるが、縞帳にみられる赤の色味が三河のそれと異なっている。一般的に赤染料としては茜と紅花であるが、本研究の縞帳の赤は紅花染料にみられる透明感がある。その赤について解明したいと考えていたところ、「東白川町誌」の中から天明3年の紅花借金証文史料をみる事ができた。「紅花質草金子借甲証文、借用仕申金子之事、一、文金三分ト銀老奴八分ハ、本金也、右ハ当冬払金ニ差詰り、借用仕申所実正也、則しち入ニは、来辰ノ夏紅花不残書入ニ仕申候、若不足仕候ハは、右質入売払、少も無滞り急度御勘定可仕候、為後日、請人加判仍而如件、天明三卯年十二月廿二日、借主 川向 ○○印

また大正3年10月15日発行の「東白川村誌」田んぼの作物の中に紅藍(べにばな)が掲載され

表4 越原家縞帳分析結果

P	数				対称	非対称	不明 その他	配 色							その他 特徴
		縞	格子	その他				1色	2色	3色	4色	5色	6色	7色	
1	39	31	8		12	24	3		12	13	10	4			
2	55	45	10		18	35	2		10	21	15	7	2		
3	32	28	4		6	23	3		6	12	10	3	1		
4	35	29	6		6	28	1		10	5	13	5	2		
5	41	37	4		9	32			8	14	14	5			
6	35	30	4	1	2	31	2		4	18	9	2	2		小紋1
7	22	15	7		6	15	1		10	7	3	2			
8	22	14	7	1	5	16	1		15	6	1				縞1
9	48	39	8	1	19	24	5		10	18	14	4	1	1	縞縞1
10	35	27	8		4	26	5		8	9	9	7	2		
11	38	30	8		16	22			17	14	7				
12	31	23	2	6	6	19	6	1	23	7					絹、綾 織多い
13	57	49	8		10	42	5		23	23	10		1		縞
14	34	21	5	8	5	22	7	1	12	15	5	1			縞4, 10種
15	43	36	7		12	26	5		21	13	8		1		
16	14	13	1		8	6			8	5	1				
17	2	2				2			2						
18	25	24	1		13	12			18	5	1	1			
19	41	36	5		20	15	6		26	13	1	1			
合計	649	529	103	17	177	420	52	2	243	218	131	42	12	1	
%		81.5%	15.9%	2.6%	27.5%	64.5%	8.0%	0.3%	37.4%	33.6%	20.2%	6.5%	1.8%	0.2%	

ている事からも紅花の赤を使っていたことが想像できる。

更に紅花の染色法は、「延喜式」縫殿寮の雑染用度に記載されている。それによると、わら灰でアルカリにして、うばい（梅の燻製）によって中和させると記されている。従って、この材料は身近なもので山村においても染色が可能である。しかし高価であった事が前記借金証文史料からも知ることができる。従って縞帳にみられる赤は1本或いは2本で極くわずかに使われ、それは絹糸であり、細い赤が美しい効果を出している。なお縞の配色、染料については、今後分析方法を追求し検討したい。

#### 明治期の転称の木綿縞

明治期の常民の衣料となった縞は、紺を中心とする染織文化である。木綿の縞帳に見られる紺を主体とする木綿縞は、簡素で日本的に消化されているがその系譜を辿ってみると外来の朱印船がもたらした影響は大きい。「室町時代の南蛮貿易の輸入品の染織には当時の我が国のものとは品質において格差がみられた<sup>8)</sup>とあることから、これらの染織品は、当時の日本に大きな影響を与えたことを知ることができる。従って従来、織筋とよんでいたものが、島々から来た染織ということで「島」と転称されその後「縞」となった。「縞」へと転称される時期とネーミングとの関係を探るため文献により当時の染織生産地を調べた。江戸初期における文献『毛

吹草<sup>9)</sup>これは松江重頼1602～1680俳書であるが第4巻には染織関係の品の生産地を知る資料がある。「従=諸一國-出<sub>ル</sub>古一今、名一物聞-觸見-及類載<sub>レ</sub>之但<sub>ハ</sub>庭一訓-用-分<sub>ハ</sub>除<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>」とあり内容に「嶋」織物の名称が記されている。ここでは7件、山城、畿内、攝津、武蔵などでいずれも嶋の字があてられている。また『万金産業袋』三宅也来<sup>10)</sup>享保17年(1732)第4巻に織物類の項あり、当時代の織物の様子を知ることができる。丹波嶋、飛驒嶋、……などここでも嶋の字が使われている。辻合喜代太郎氏『縞』<sup>11)</sup>において、江戸時代中期頃まで嶋を使っていた。「縞織物私考」<sup>12)</sup>において中期ごろまでは混用が続けられていたと述べている。島から来た縞模様には刺激を受けて外来の縞を模して織り、日常生活の中で日本的なデザインに消化させて行った。この段階において「縞」に転称し今日に至ったと考える。従って、表紙に嶋本、寫本、嶋本の字が書かれているものは江戸後期ごろのものとの考え方もできる。

## ま と め

生活文化遺物として可能な限り正確な分析を記録に残す必要性を感じその方法を検討しながらこの研究を進めて来た。649種の裂を分析するにあたって大変な時間を要したが手織木綿縞の密度や素材を分析したことによって手紡ぎの自家用木綿即ち明治初期の主婦たちの仕事であった手織木綿の一面を明らかにすることができた。

資料の縞帳は22年3月寫本と記されているものであり、とじの状態から完成時に月日を記したものと推測されるので裂はそれ以前のものと考えられる。

明治初期であれば手紡ぎであると断言できるわけであるが、明治中期ごろは紡績史から考えても、ガラ紡、洋紡績が普及する時代でありその過渡期と考えられる。小さな実物裂から判断することは難しいが、撚りの甘さとむらな糸の太細、撚りの方向等を何回か観察することによって、中には均一の紡績糸らしいものも含まれているが、多くは手紡ぎであろうと判断した。また特に糸入り木綿が多かった事は、越原家庄屋雄右門が寛政5年に桑園を開き、寛政11年に製糸業を営んでいたことに関連する。素材、密度分析で手間がかかり、染色、縞割(縞デザイン)の解明をすることができなかつたが今後、ひき続き種々の視点からデータを積み重ねることによって木綿縞の染織文化を明らかにしたい。自家用の木綿縞こそ、渡来の嶋の愛着や憧れから脱脚し、日本人の簡素で繊細な美意識と精神から生まれた縞のデザインであると考えている。またそれらは、日本女性の姿を表現しているように思われる。最後に、貴重な資料を拝借、提供いただきました学長越原一郎先生及びご教示いただきました方々に感謝致します。

## 文 献

- 1) 竹内晶子：近畿の民具，6，30～40，(1986)
- 2) 高橋キヨ子，佐藤和子：福島女子短期大学研究紀要，16，11～35，17，167～180 (1987)
- 3) 河村瑞江，松田ほなみ：三河湾をめぐる海村地域の生活文化，301～303，名古屋女子大学生活科学研究所 (1987)
- 4) 角山幸洋：ペルーエル・プルボ遺跡出土裂調査報告
- 5) 東白川村誌編纂委員会：東白川村誌，526，714 (1980)
- 6) 荻田乙三郎他3名：東白川村誌，691，(大正3年)
- 7) 角山幸洋：染織と生活，28 (1979)
- 8) 黒板勝美編輯：延喜式，400～402，国史大系巻14，吉川弘文館，(1937)

- 9) 松江重頼：毛吹草，寛政4年，157～185「岩波文庫」新村出校閲，竹内若校訂
- 10) 三宅也来：万金産業袋，享保17年「通俗經濟文庫」日本經濟叢書刊行会発行（大正5年）
- 11) 辻合喜太郎：縞，76～79，衣生活研究会（1963）
- 12) 鷹司綸子：服装文化，82，（1963）